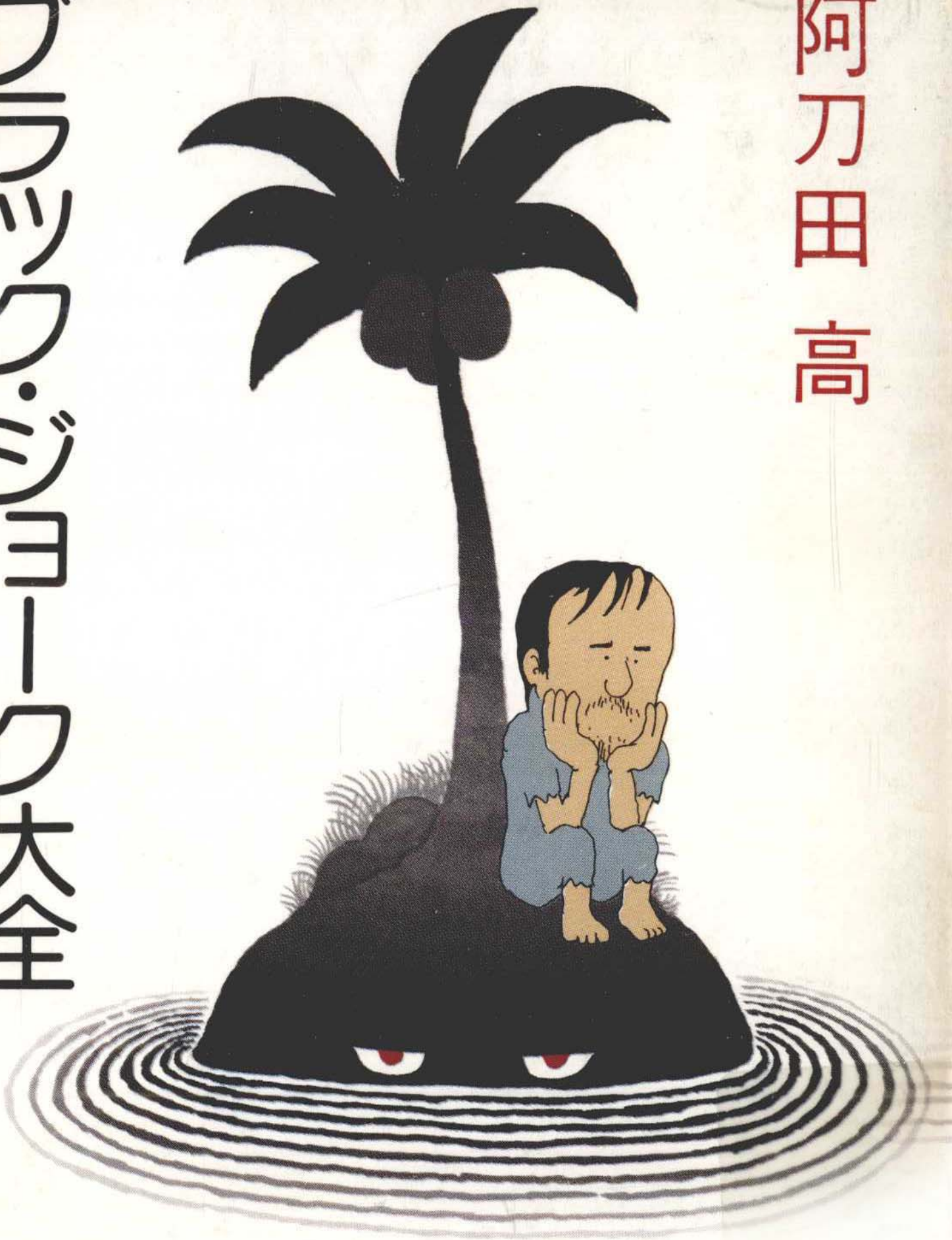
ブラック・ジョーク大全

阿刀田 高



ブラック・ジョーク大全(たいぜん)
阿刀田高(あとうだたかし)
© Takashi Atoda 1983

講談社文庫
定価380円

昭和58年9月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版———株式会社東京印書館
印刷———凸版印刷株式会社
製本———有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-183093-7 (0)

講談社文庫

ブラック・ジョーク大全

阿刀田高

講談社

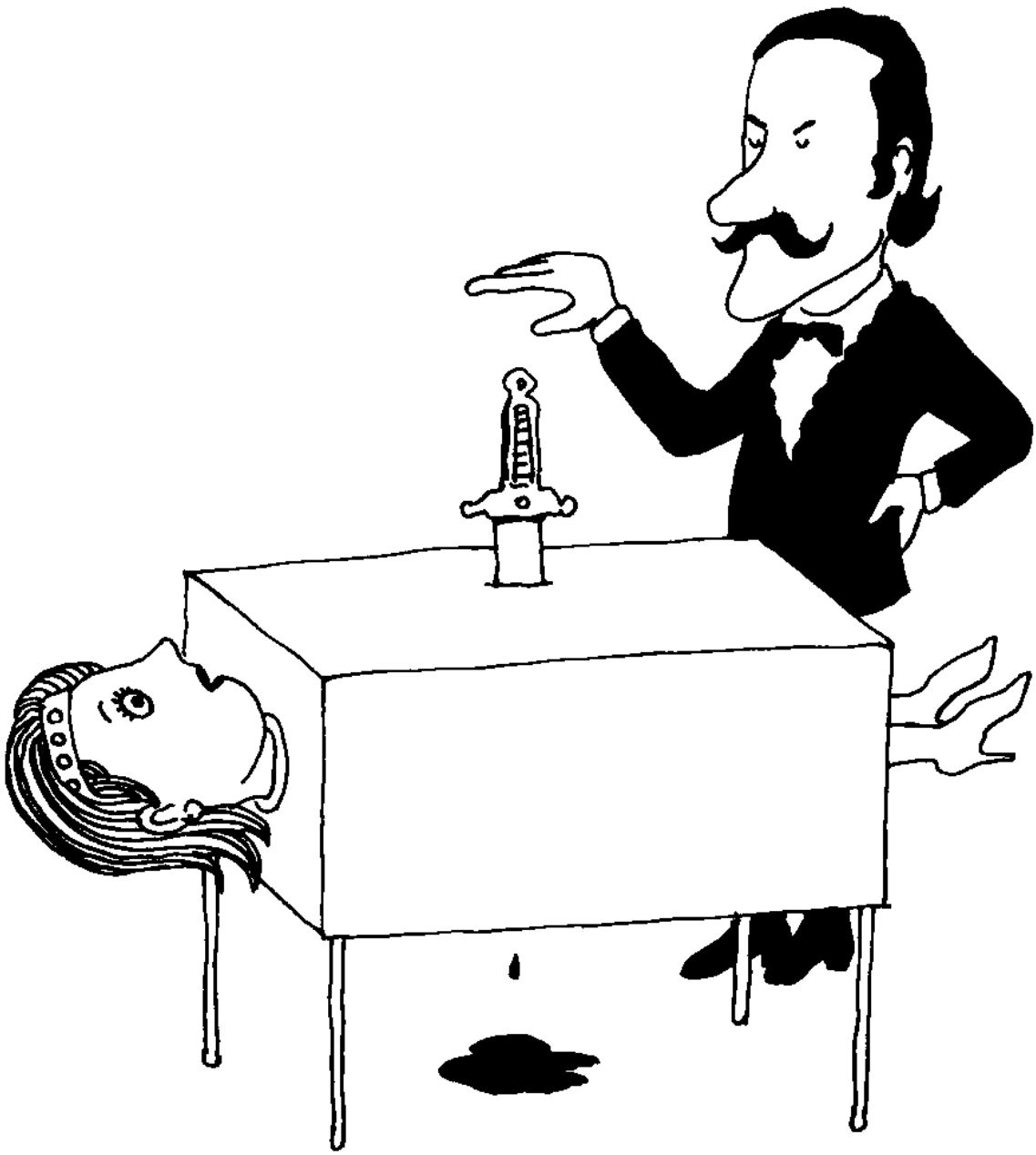
目次

ブラック・ジョーク大全　七
甘口と辛口―一つのエピローグ―　阿刀田　高　三五

本文カット　畑田国男

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ブラック・ジョーク大全　PART　I



公園で

男「あなたと結婚できないくらいなら、ボクは死んでしまうよ」
女「本気でそう言うの？」
男「もちろん」
女「わかったわ。じゃあ、ぽつぽつ日取りを決めて予約しておかなくちゃあね」
男「うれしい！　式場を決めるんだね」
女「ううん。葬儀屋さんのほうよ」

薬屋で

客「胃の薬をくれないかな」
店主「消化不良ですか」
客「うん。胃がもたれてね。特別によく効くやつを頼むよ」
店主「じゃあ、このトケルンになさいませ」
客「よく効くかね」
店主「ええ。それはもう、消化不良にはピタリです。このあいだなんか、これを飲んで自分の胃袋を消化しちまった人がいるくらいですから」

学校で

校長「みなさん。兄弟は仲よくしなければいけませんよ」
生徒「でも、うちのお父さんはお医者さんだから、兄弟が仲よくすると世間の誤解を受ける、だからやめようって、いつも言ってます」
校長「どうしてお医者さんは兄弟仲よくしちゃいけないんですか」
生徒「お父さんには弟が二人いてお坊さんとお肉屋さんをやっているからです」

ロケーションで

監督「さあ、この崖の上から思いきり海に飛び込んで」
女優「とんでもないわ。そんなことしたら、死ぬか、大けがをするか……」
監督「いや、いや。心配ない。これが最後のシーンだから」

教室で

女教師「89たす58たす91よ。どうしてこんな簡単な計算ができないの?」
六年生「でも、ボク、気が散ってダメなんです」

女教師「黒板に数字をタテに書いてやってごらんなさい」
六年生「タテに並べると余計に興奮してダメなんです」
女教師「あら、どうしてかしら？」
六年生「先生の裸は、きっとそのくらいのボディ・サイズでしょ」

一等船室で

乗客「おい、船長。この船のトイレはどうなっているんだ。汚水が溢(あふ)れ出てるぞ」
船長「申し訳ありません。なんでしたら船賃をお返ししてもよろしいのですが……」
乗客「金を返せばそれですむってものではあるまい」
船長「その通りでございます。ただ、その点にご理解がいただけますと、あとのお話が大変やりやすくなるものですから」
乗客「あとの話？」
船長「はい。船はいま沈みかけております」

酒場で

男A「どうもこのごろ夢見がよくないんだ。イライラして困ってしまうよ」
男B「実はオレもそうなんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

男A「アパートに帰ると、机の上にすばらしいウィスキイのびんが載っている」
男B「うん、うん」
男A「しめた！　と思って飛びつくと底に穴があいてるんだ」
男B「オレの夢と正反対だな」
男A「おや、そうかい」
男B「うん。アパートに帰ると、椅子の上にすばらしい美女がすわっているんだ」
男A「うん、うん」
男B「しめた！　と思って飛びつくと、底に穴があいてないんだ」

金網の前で

死刑囚「今度の日曜日に刑が執行されるらしい」
その妻「あら、そう。子どもたちを連れて見に来るわ」
死刑囚「バカなこと言うな！」
その妻「ひどい人。それでも、あなた、父親なの？」
死刑囚「……？」
その妻「日曜日くらい、たまには子どもたちにめずらしいものを見せてくれたって、いいじゃないの」

洋裁店で

奥さま「このスーツ、とてもすてきな柄ね」
店主「はい。当店自信の品でございます」
奥さま「それにデザインもとってもいいし……」
店主「はい。当店自信のデザインでございます」
奥さま「鏡はないかしら？」
店主「いえ、ございません。そこまでは当店といたしましても自信が持てませんので……」

町角で

子ども「お母さん。まっ赤な手袋が落ちているわ」
母親「あら、中身も入ってるわ」

オフィスで

男A「謎のバミューダ海域を知ってるかい？」
男B「うん。女房の財布みたいなものさ。みんな吸い込んで、いつの間にか消えてしまうんだ」

町で

少年「お巡りさん。早く来てください。大変です」
警官「どうした？」
少年「お母さんの留守中に、よそのおじさんがお父さんとすごい喧嘩をしてるんです」
警官「どこで？」
少年「すぐそこです。早く……。ボクのお父さんが殺されちゃう」
警官「なるほど。あれか？　すごい喧嘩だな。どっちがキミのお父さんなの？」
少年「ボク、わかんない。それが喧嘩の原因なんです」

火葬場で

男A「キミが病院に見舞いに来てくれないって、奥さんさびしがってたらしいじゃないか」
男B「オーバーなんだよ、あいつは。最後はノイローゼ気味だったしね」
男A「冷たいんだなあ。ゴルフばかりやってたんだろう。気ちがいだからな、キミは」
男B「気ちがいはひどいよ。ほんのたしなむ程度だよ」
男A「そうかねえ」
男B「うん。でも、キミがゴルフのことなんか言い出すものだから……」

男A「だから？」
男B「ちょっと、その……骨が焼きあがるまで、そこの練習場へつきあってくれよ」

庭先で

母親「あら。ナイフなんか持ち出して……どうするの？」
少年「銀行ごっこをして遊ぶんだよ。ボクは銀行の人で、サブちゃんも、ミッちゃんも、ハナコも、みんな預ける人になるんだから」
母親「そう。でもどうして銀行ごっこにナイフがいるの？」
少年「だって血液銀行だもン」

警察で

女「先週の日曜日、知合いの家からトロロいもをもらったんです」
警官「ほう？」
女「トロロ汁を作ろうと思ったんですけど、おいもをおろす道具がありません」
警官「ほう？」
女「それで昼寝をしていた主人を起こしてデパートまで買いに行かせたんです」
警官「ほう？」

女「それっきり帰って来ません。どうしたものかと思って……」
警官「どうしたものかって……千切りにして食べてもおいしいですよ」

客間で

女A「おたくのご主人、趣味はなんですの？」
女B「それが大工仕事なの」
女A「まあ、それはいいわねえ。便利で」
女B「そうでもないわ。定年後はひまでしょう。庭椅子も本箱も飾り棚も踏み台も、必要なものはみんなもう作っちゃったの。なんだか張り合いをなくしたみたい」
女A「あら、でも、まだいいものが一つ残ってると思うわ」
女B「なーに？」
女A「棺桶」

町のどこかで

男A「オレにだけ打ち明けてくれ。キミが青酸カリで無差別殺人をやった犯人なんだね」
男B「うん。後悔している」
男A「そうか。本当にわるいと思っているんだな」

男B「わるかった。せめての罪ほろぼしに……」
男A「罪ほろぼしにどうする？」
男B「コンドーム工場に忍び込んで……」
男A「コンドーム工場？」
男B「そう。針でコッソリ穴をあけて、今度はせめて無差別出産を……」

教室で

先生「空恐ろしい、って、どういうことですか？」
生徒「はーい、先生。飛行機事故のことです」

食卓で

夫「おい、メシはまだか」
妻「そうせかさないでよ。手は二本しかないんですからね」
夫「馬鹿を言うな。時計だって手は二本しかないけど、チャンと八時になってるんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com